

枯木山脈

美月の祖母の住む家の裏には山がある。

標高千メートルを超え、徐福や空海の伝説のある山はかなり大きいのだが、美月の母の里美はただ裏山と呼んでいた。

その呼び方にふさわしい気軽さでふらりと入っては、ノビル、ツワブキ、タラノメ、ツクシ、ワラビ、ゼンマイと、たくさん山の山からの贈り物を持ち帰る。ほんのりと渋い後味が残る赤いゲミの実が六月の頃で、それからしばらくは山歩きも夏休みになる。ヤマヒルが出るからだそうだ。

秋になるとアケビ、ムカゴとヤマイモ、正月にはユズリハを近所に配るほどとってくる。

「どこからとってくるのかわからんのよねえ。ここで育ったわけでもないのに、よう山のことを知つとるわ」

祖母の栄子は首をかしげるのだが、里美は「内緒」といたずらっぽく笑っただけだ。

そもそもここは栄子の実家で、入院中の美月の曾祖母に代わって墓と古い家を栄子は一人で守っていた。

母の里美も小さい頃は休みのたびにこの田舎に連れてこられていたそうだ。里美が生まれ育ったのは美月たちと同じ市内の一軒家で、今は祖父の靖夫が老犬とのんきに留守番をしている。

田舎の一人暮らしはさびしいだろうと、里美はこのところ毎週のように里帰りをしていた。美月の弟の翔平はそのたびに「またあ？」とう

んざりした声を出すものの、祖母からもらうお小遣は魅力的らしく、結局は黙って車に乗り込んでいる。

美月は小さい頃からゲームよりは外で遊ぶ方が好きだったし、休みのたびごとに過ごす田舎の景色なんとなく気にいっていた。空気の甘い匂いせいかもしれない。

ゴールデンウィーク初日とはいえ早い時間のことで道はまだ空いている。

気がつくと、車窓の景色はとくに田園地帯のそれに変わっていた。今朝まで降り続いていた雨のおかげで一段と濃くなった緑にレンゲの紅色がよく映えている。そんな景色を見ることがなく、バックシートの翔平はポータブルのゲームに没頭していた。

「学校で作文の宿題が出るんだけど困ってるの」

午後になって、いつの間にかいなくなっていた里美は夕方近くになって戻ってきた。今日はツワブキが大漁で、三代の母娘たちは広げられた新聞紙の上で指を黒くしながら皮をむいていた。翔平は暮れはじめた縁側でまだゲームをしている。

「どうしたの？」

里美と栄子は皮をむくのが早い。二人はまるで競争をしているような勢いで、美月が一本むく間に三本くらいむいてしまふ。

「『達人』について書きなさいって言われたんだけど、何を書けばいいのかわからないの」

「それは難しいねえ」

栄子は時計を見ると、立ち上がって炊飯器のスイッチを押しに行った。「達人か……」

「先生も同じ宿題が出てるんだって」

「小学校の先生つても大変なのね。気楽な主婦でよかったわ」

里美は手を止めて、肩に手をあてこきりと鳴らした。

「そつだ。お母さんのおばあちゃんのこと書けばいいんじゃない？ ひいおばあちゃん味の味噌汁、すっごい美味しいよ」

そこに戻ってきた栄子が、口をはさむ。

「確かに母さんの味噌汁は真似できないねえ。適当に作ってるのに、何が違うのかねえ？」

「私、ひいばあちゃんの味噌汁、食べたことあるの？」

美月の記憶にはない。

「あるけど、ちつさいころだから憶えてないかもね」

それじゃあ書けない、と美月は肩を落とした。

「じゃあ、お母さんのこと書いたらねえ？ おばあちゃんは子どもの頃、住んどつたからこの辺のことはよく知つとるけど、こんなにいろいろは取つてこれんよ」

「お母さんは『裏山の達人』かあ。それいいかも」

美月はナイフを放り出して、ノートと鉛筆を持つて来そうな勢いだ。

「あたしは達人なんかじゃないわよ。達人なら他にいるんだから」

嬉しそつに盛り上がる祖母と娘に、母はそつけない口調で水を差した。

「誰ね、それは？」

不思議そつに栄子が尋ねる。里美の山菜採りの腕前は地元人間にもかなわない。思い当たるような人物がいないからだ。

「クマノタツヨシって人」

何度か名前を繰り返していた栄子が何かに気づいたような声を上げた。

「それつてあんたが見つけたあの……」

里美が初めて山に一人で遊びに出かけたのは十歳の、やはりゴールデンウィークに入つたばかりの午後のことだつた。

現在のようにゲームがあるわけでもなし、子どもが暇をつぶすものといえはマンガくらいしかない。持つて来たマンガは往きの車の中で読んではまった。大人たちは茶摘みで忙しくて構う暇はない。

ひとりで入つたらいかん、迷つて年に一人くらいはいなくなるんだから、と言ひ含められていたにも関わらず、退屈を持て余した子どもにとつては山は庭の延長でしかなかった。

そんなわけで、舗装もされていない小さな山道を歩いてた里美の足が、がさりという音を聞きつけ止まつた。藪の中から姿を現したのは小柄な老人だつた。

「おやあ、あんたはどこん子ね？」

にこにこ笑つ顔は日光と焼酎に焼けて赤黒く、縁がほつれた黒い野球帽と紺色の作業着で、首にはタオルを巻いている。

「山元ミヨの孫の里美です」

田舎では自分の名前より、誰その子だ孫だというほうが通りがいい。

「あいや、山元さん家のへんまで来たかいね。ちよつ行き過ぎたね」

ぼやきながら、老人は自分のいる場所を確認するよつに周りの風景を見た。

「もうちよつち採つて帰らにや、孫に送る分にや足りんたつどん。時間がなあ」

老人は振り返つて背中大きな竹かごをゆすつた。かさかさと軽いものが揺れる音がした。

「何が入ってるんですか？」

「見てみるね？」

籠を背からおろし、ほれと里美の前に傾けた。

「あ、ワラビだ」

茹でて塩漬けたものが里美の家の冷蔵庫にも入っていて、たまに煮つけに混ぜている。煮る前のものも見たことがある。

「おお、知っちゃいいね。ところであんたは何ちゃんだったけね？」

「里美です」

「ああそうね。里美ちゃんね。里美ちゃんは栄子ちゃんの子やつけね？」

「そうです」

答えながらも母の名前を知っていることに内心驚いた。だから田舎の人間関係はあなどれない。

「何年生ね？」

これも聞きなれた質問だ。しかも同じ人から何度も何度も聞かれる。

「五年生です」

はきはきと答える里美の頭をぼんぼんと老人は軽く叩いて、偉かねーとほめ、あ、と思いついたような声を出した。

「里美ちゃんにお願いがあつと」

あつと、というのは、あるんだけど、という意味である。

「おじちゃんの手伝いをしてくれんけ？ お礼にワラビがずんばい採れるところを教えてあげるで」

どう見ても「おじいちゃん」にしか見えないんだけどなあ、と思いつつ、里美は頷いた。ワラビは母の栄子の好物なのだ。

「じゃ、一時ここで待つちよつてな」

老人は籠を下ろすと中からカマを取り出し、再び藪の中に入ってい

た。

待っている間に里美は、竹の籠の縁に何かが書かれているのに気がついた。黒いマジックインキで書かれたカタカナはクマノタツヨシと読めた。

ほどなく何やら細長い緑色のものを抱えて帰ってきた老人は

「よかった、まだおつたね」

と、にかつと笑つて、草の上にとかりと腰を下した。それから抱えてきた蔓のようなもので、何かを作り始めた。あつという間にできたそれは、里美のための小さな背負い籠になった。

「わあ。すごい！」

目を丸くして喜ぶ里美を老人はうれしそうに見ていた。

それから数時間、里美は老人から彼が知る限りの山の穴場と危険な場所を教えてもらった。

これはグミと老人が指差すのは青い実の下がった低木。ツワブキの生えているところもあちこち教えてもらった。秋になったら黄色い花が咲いて、タンポポのように綿毛を飛ばすのだという。

「ここが穴場中の穴場じゃつと」

老人は満足そうに笑った。

たどり着いたワラビの群生地は日当たりのよい、谷間にぽっかりと開いた草地にあった。ワラビは、たくさん小さな緑の小人が両手を組んで太陽に祈りをかざしているようにも見えた。

ワラビをぽきんぽきんと採っていく。里美の手伝いもあって、老人の籠はたちまちいっぱいになった。里美の籠までいっぱいにする頃には、陽はまだ明るかったものの、夕方の気配がしていた。

途中の道でも老人は、あれやこれやと現在位置の確認方法や山の幸のある場所を解説しつつ、途中で息を切らしたのか、ちよつと待つてなと道端に座り込んだ。

「どうしたの、おじいちゃん？」

心配した里美が近づいたときには、老人の体は横倒しになっていた。表情は眠っているようで穏やかだったものの返事はない。

幸い覚えのある国道はすぐ下に見えていて、祖母の家にも近いことがわかった。里美は籠を背負ったまま走った。

大人たちを連れてもどつてきたとき、先頭を歩いていた祖父が振り返つて「里美を連れてくるな」と叫んだ。それで里美にも老人は助からなかったのだということがわかった。

「それってあんたが見つけたあの……」

「そう。クマノタツヨシさん」

「でも、あのとき見つかったのは白骨死体だがね。熊野のじいさんはあの三年も前に行方不明になつたんだから、そんなことはありえないけどねえ。ここで会ったこともないはずだし」

「でも、あのおじいちゃんに教わつたのよ、山菜の採り方と穴場」
「信じられない話だねえ」

全部むき終つたツワブキを大きなざるに入れながら栄子が首を横に振る。

「だから今まで話さなかつたんじゃないの」

「それが本当なら、その人のお願いつて『自分を見つけてほしい』ってことだったのかねえ？」

栄子の問いに美月の「じゃあ、幽霊？」という面白がつているような

悲鳴が重なる。美里は黙つて後片づけをしている。

「お母さん、怖くなかつたの？」

新聞紙ごとくるんだゴミを持って立ち上がった母親に美月は改めてたずねてみた。

「全然。だつていい人だったのよ。あの人こそ、本当の『裏山の達人』だったわね」

32 桃の飛来

五十殿 弘樹

俺の目の前には卓があつて、犬、猿、雉と四人で囲んでいるつていうと桃太郎一行が座談会しているようだ、ポイントとしては「四人」というところで、卓についているのは全員人間の男であり、俺が今便宜上の呼称で呼んだだけつて言えばそれまでなのだが、今日はいわゆる飲み会つてやつで動物に喩えられてるのはいつもの飲み仲間、「友達」なんていうのも気恥ずかしいような馴染みの面子で、そいつらに面と向かつて「お前は猿な」とか言つたら殴られるかもしれないが、豚とか河童には喩えられないんだな、これは。桃太郎の話の中では犬が「忠」、猿が「智」、雉が「勇」をそれぞれ象徴しているらしいよね、こいつら正にそうなんだよ本当いいバランスでいい奴らなんですよ、とか別に意図してない情報を付加しつつ、それは実際に目の前で起こっていることとなんら関係なく、つて、あつ俺が桃太郎？ 主役かい、それは無いわ、つて自ら

お役御免を言い渡しとりあえず酒をかつくらって、げはげは笑いながら「お前、奥さんと最近、あっちの方はどうなんだよ」などと下世話な話を展開していく完全におっさんと化した俺21歳。歓談は続く。

「達人つてのはフィーリングを超越した世界の人間だと思わないか？」猿は、好きなカップラーメンの話題で盛り上がったところ、麺の達人の名前が出たのに対して、そのような反応を示した。雉はそれに対し、この前ラーメン屋で「湯切り」を見た際、「あれが達人技か」とラーメンの話題を引きずりつつ反応した。猿はそれに大して取り合わず、なおも達人とは何かという論議を持ち掛けたらしく、自分の考える「達人」像を述べ出した。

「まず達人はストイックでなくてはならない。一つのことに没頭することと世間体を無視し変人扱いされようが気にせず、かつ憑りつかれているとか操られているわけでなく、自分の確かな信念・意志を持っている人ではないか」

俺にとつて猿の挙げる「達人」像は分かりやすいステロタイプであると思った。だからか軽視的に「そんな奴いねえwww」と掲示板に書き込むような感覚で反応した。猿はそれに気を止めず、

「達人は生きる意味とかで悩まない。生きる意味を知っている」と続ける。

犬は言葉少ない人間である。無口というか愛想がないという評価をよくされがちである。酒の席でもたまに人の発言に微笑むだけで積極的に会話に参加しようとはしない。俺らの中では一番大柄で、朴訥とした感じだが憎めない空気を持っている。今日もその調子は変わらず、猿が先

導する会話に興味が無さそうにしていた。

俺は猿の相手をするのに苛立ち始め、少々の悪意を含んだ調子で犬に唐突に話題を振った。

「お前は確か達人的な特技があるんだよな」

言つてすぐ俺は額に汗を溜め口角を下げた。「言っちゃったよ。ネタ振りつてかこれはこの振りは無いわごめんね」と心の中で唱えた。

犬は途端に立ち上がった。猿は自分の話をもっとしたそうだが、犬が立ち上がったのに対し「おつ、いいねー」などと言い、煽った。

犬は口を開く。

「いつか俺にもこの時が来るだろうと思った。何故か今は不思議と嫌じやない」と簡単に前置きをし、「一発芸」と叫んだ。俺も猿も雉も、そして周りにいた他人も犬に注目した。

犬は幼少の頃より体格に恵まれており、何か言葉を話さなくても一目置かれる存在だった。彼が「自分は不器用な生き方をしているのではない」と病むようになったのは社会に出てからである。同期の人間は上司としきりにコミュニケーションしている。しかし、上司は自分には話しかけづらそうにしている。

「これでは出世なんかできない。馬鹿になるのも仕事だ」そう思った。

彼はテレビで見たお笑い芸人が超越者のように思えた。大衆に媚びていながらもそれすら信念としてしまえるような優れた人間。彼は芸人の芸を見る度、日々の何気ない観察が彼らの発想を豊穡にしていると思っ

た。彼らの観察力はすごい、異常だ。ものまねに始まり、漫才にしてもすぐれた観察の集大成がそこにあった。

彼は悟った。作家にしてもそうだ、達人とは観察者である。時間をかけ、向き合う。だからこそ、自己にすら深い洞察をすることができる。「行為、そして行為者としての自分」を理解しようとしている。「なぜ自分がこの行為を行うのか」よりもずっと先の問い。「やる上で」を考えている。

さあ。

犬は無意識の戦場にいた。

犬の目の前に鬼が胡坐をかいている。

鬼は犬がだらしなく口を開け、自身を眺めているのを見て声を掛けた。

「おい、その犬野郎」

犬は自身が犬であるとは思っていない。ただ、目の前にいる角の生えた人間、「鬼」を認めひどく打ち震えた。

「お前が俺んとこに何をしにきたか大体検討はつくよ」

鬼はのっそりと立ち上がった。犬は大きく息を吸った。そして、

「なあひどく落ち着いているんだよ。ただ、お前を殺していいのかとか、モラルがどうのとかいう疑問は湧いてくるけどね」

と、冷めた目で言った。鬼はそれを聞き、笑った。

「鬼を見て、殺す。なあそれでお前はモラルがどうのとか分けわかんない事言ってる。殺すという言葉が出た時点で初めから答えは分かっているんだろ」

犬は敢然と鬼へと走り寄った。

鬼はそれを制止して言う。

「様々なアプローチがある。お前にできることは何かわかるか」
犬は構わず拳を振り上げた。

あたりは不意に暗くなる。

犬は自己を自己として捉えられるか曖昧な暗闇にいた。

暗闇にいくつかの音が散らばる。それが誰の言葉なのかは一切不明である。犬は光の届かないどこかで確かにその舌を出している。

「方法はただ一つではない。ただ、複数あるとは限らない」

「Do or Die の場合もある」

「観察とは興味を紡ぐこと」

「興味、それはありもしないことなのかもしれない」

さあ。

犬は息を大きく吸い、目を見開いた。その刹那の間に皆の「興味」が集中した。これから「観察」が行われる。

「少林寺拳法！ はっ、はっ、はっ、はっはっ」

犬は相手の攻撃をいなしながら、自分の攻撃へと移行していくいわゆる少林寺拳法の「型」を披露した。確かにその動きはあまり見慣れないものであり、滑稽でもあった。

小笑いと、嘲笑に似た品の無い笑いと、笑い出す人につられた笑いとが空間を反響する。そして間もなく拍手が起こる。

犬は座ると息を吐き、呆然と全身の熱を感じるだけだった。

俺は笑う。

「お前が少林寺とか、冗談なのかマジで免許皆伝なのかわかんねえよ」俺の指摘に猿は大声を出して笑った。

それからも犬に幾らか声を掛けるが彼からは微笑みを返す以上の反応はなかった。

また「興味」は散漫に漂い始める。歓談は休みなく続く。

33 戦いの後の静けさ

佐々木 京太

その道場は比較的新しい建物だった。オフィスビルとしても通用しそうな外観。汚れ一つないガラス戸を開けるとそこには制服を着た受付嬢がいる。カウンターの脇の台の上には子どもたちの背丈ほどもある花が活けられており、その斜め後方の壁には額縁に入った絵画が掲げられている。

ここは道場である。こじやれたシティホテルと間違ったわけではない。

と俺は自分に言い聞かせた。俺が所属している道場とはあまりに違う。幼少の頃から俺を鍛えた道場は築五十年になるうかという木造建築。受付嬢も花も絵画もない。財力の差を思い知らされる。

カウンターの向こうにいる受付嬢が笑顔を作ってお辞儀をし、歓迎の意を表している。俺は彼女に名前を名乗り、用件を伝えた。約束は取り付けてある。「お待ちしておりました」と彼女は手元のリストを確認してから俺にまた微笑みかけた。

何がお待ちしておりましたか、と俺は心の中で呆れていた。道場破りをにこやかに歓迎する道場があるとはな。俺は彼女に促されて闘技場へ向かった。

闘技場は丁度バスケットボールのコートが二つできる体育館くらいの広さ。壁は白一色で、よく磨かれた木の床面が蛍光灯の照明を反射している。

道場の主はそこで仁王立ちして待っていた。白い道着に身を包み、射抜くような視線を向けてくるのは女性。引き締まった体と小さな頭部。黒髪を後ろで束ねている。腕組みをした堂々たる姿勢。確かまだ二十六歳。俺よりも五つ年下だが、若くして頂点を極めた無敗の王、達人と呼ばれる女だ。

彼女は俺の姿を一瞥して言った。

「なかなか風格があるね。さすが今年の選手権の優勝者」

「社交辞令は必要ない」

と俺は答え、女を睨みつける。

「いいね、その気迫。すくいいい」

彼女は嬉しそうに言う。子どもを誉める母親みたいな笑顔だ。余裕綽々の雰囲気が入らないが、この女にはそれだけの實力がある。

全日本選手権大会を制した俺だが、それだけでは日本一を名乗ることはできない。この女を倒してはじめてその資格を得られる。目の前にいるこの女は大会に出場していないが、三年前に大会五連覇を達成したのだ。ずば抜けた實力を認められ、男子の大会に特例として参加していた彼女は、何と一度も負けることなく王座に五年間君臨した。その後、もう大会から得られるものはないと告げて、無敗のまま表舞台から遠ざかってしまった。生ける伝説と言っている。

「いつまでその余裕を見せていられるかな」

伝説の選手の前だからといって萎縮するわけにはいかない。俺は逆に彼女を威嚇するよう、低い声で言った。左拳を前に出し、構えを作る。

「なるべく長く余裕でいたいものだけど、あなたの様子を見てると簡単にはいかなさそうだな」

女も俺と同じように構えた。びんと張り詰めた空気を纏うが、その顔はまだ笑っている。

「悪いが今日でお前の無敗伝説は終わりだ」

と俺は凄む。

「だめ」

女は舌を出す。片目を閉じたその顔は、何というか、その、可愛い。

「……目にももの見せてやる」

瞬間、俺は雑念を払うように地面を蹴って一直線に駆ける。小刻みな足音を後ろに残し、前方に跳躍。首ごと薙ぐつもり横一線の蹴りを放ったそのとき、彼女はもうそこにはいない。

即座に俺は後方を振り返る。彼女は一瞬で回り込んでいた。突きが眼前

に迫る。彼女の右拳を左手で叩いて軌道を変えた。

危機を回避した俺はカウンターのストリートを叩き込もうとしたが、彼女が遠ざかりその攻撃は届かず。彼女は拳を戻すのと同時に前蹴りを放っていた。俺の腹部への鋭い打撃。お互い反動で弾かれ距離ができる。

「留守になつてたよ、ボディが」

女は小さくステップを踏んで得意気に体を揺らしている。

「顔面にもらわなきゃ大丈夫だな。この程度の軽い蹴りならよ」

俺は精一杯強がる。実際にはかなり痛い。ダメージは内臓まで広がって疼いている。

「よかつたら聞かせてほしいんだけど、どうして私と戦おうと思ったの？ 全日本選手権の優勝者が、わざわざこんなことする必要はないでしょうに」

女の問いに、俺は少しばかり思慮する。こいつに挑戦した理由、それは、

「日本一の達人を名乗るには、お前に勝ったという事実が要る。みんなお前が一番強いと思ってるからな」

「なんだ、そんなこと。選手権優勝者なんだし、日本一は好きに名乗ればいいじゃない」

女はそれだけ言って首を傾げた。

「一番強いのと、選手権の順位は別ものだ。一番強いとされているお前が大会に出ないんだからよ。誰もが残念がつてるぜ。お前は選手全員が目標だった」

俺は指差して彼女を糾弾する。力ある者は本来大会に出てその實力を証明するべきだ。大会つてものはそのためにあるのだから。

俺は自分の中でくすぶる思いを勢いに任せてぶつけたが、彼女から信じられない答えが返ってきた。

「他人に認められることに、私は興味がなくなっちゃったんだ」

「何……？」

「日本一と他人に認めてもらうことに価値はない。自分で自分を認めてあげれば、それでいいじゃない」

「いい身分だな」

俺は本心から言った。多分に憤りを込めて彼女を睨む。他人に認められることに興味がなくなっているのは、既に他人に認められた者の言い分。王者の傲慢、達人の驕りだ。俺は再び地面を蹴る。

「何者でもなく、自分自身を評価軸に据えるべきだと私は思うよ」

彼女が言い終えるのとほぼ同時に、俺の拳は彼女にガードされていた。炸裂する音が気持ち良くなるくらい高く響く。

立て続けに左でボディを打ち込む。これもあつさりガードされたがこれは想定範囲内。

利き腕である右の拳で顔面を狙う。スピードに乗った会心の弾丸。ボディを守っていた彼女のガードは間に合わない、はずだった。

俺の拳は空を切っていた。完全に見切られていたと俺はこのとき悟った。彼女はガードする必要なんてなかったのだ。身を沈めて回避し、俺の懐に潜り込んだ。

低い位置から信じがたい速度で彼女の膝が飛んでくるのが見えた。顎に強い衝撃。

「がっ……！」

思わず声が漏れた。後ろに頭を逸らして避けようとしたが間に合わなかった。俺は何か立ったまま持ちこたえたが、勝敗は決した。俺の負けだ。

「よくやったほうだと思っけど、私の勝ち」

彼女はしりとりで話す。この勝負、しりとりに関係なく言葉を口走った者の負けとなる。それがこの競技のルールだ。

「畜生……！」

俺は膝をついた。勝負は終わったが、彼女に倣ってしりとりを続ける。「運動能力には差はなかった。ただ、あなたには精神的に隙があった。攻撃が単調だった。何としても他人に認められようと、力で強引にねじ伏せようとしてたでしょ？ 気合いが入りすぎだよ」

「余計なお世話だ」

俺はやはり強がつてみたが、彼女は俺の心を見透かし、的を射たことを言っている。それは事実だ。

「大丈夫？ 立てる？」

彼女は俺に手を差し出す。

「……るせえな」

俺はその手を取らない。

「何が何でもそれは無理があるよ、しりとりにさ」

もっともな指摘だ。ぐうの音も出ない。やはりまだ力の差があったようだ。再挑戦のためにはもっと修練を積んでこなきゃな、と俺は思った。

「さすが、達人」

自力で立ち上がりながら俺は言った。

達人は口をへの字に曲げて黙った。

「はい、クレープ二つ」

「……ありがとう」

僕は府に落ちない表情でクレープを受け取った。悟の眼が、まだかまだかと輝いている。内一つを渡してやると、まるで菓子屋の家でも見つけたかのように顔まで輝かせてかぶりついた。目線を悟からクレープ屋に戻すと、そこにはやはり僕と同じくらいの年の女性が生地を焼いていた。はっぱを身に纏い、頭を鉢巻きで束ねた活気溢れる女性。その手練れた手つきが、およそ常人では生み出せない程の薄さにまで生地を延ばしている。

一枚が焼き上がるまで見ていて飽きなかった。でも見蕩れている訳ではなかった。ただ、期待と疑念に心酔わされていただけなのである。期待は心から、疑念は頭から、それぞれぶつかり合って喉の辺りで火花を散らしている。

「……あの」

火花が、ふとした拍子に口を出た。

「もしかして、昔その第二小学校に通ってたりしましたか？」

不躰だろうと思いつつも、火花は口を押し破る。クレープ屋の女性は小首を傾げつつも、そうと思わせる返事をしてくれた。心の期待が増加する。

「もしかして、カジちゃん？」

「え、あ……、うん」

「僕だよ、長谷幸弘。ゆっきーだよ」

一瞬の沈黙の後、お祭りの夜空に驚きの声が響いた。悟がびっくりしてクレープを落としそうになった。

「本当、元気な顔見れて良かった」

「僕も。まさかこんな所で会うとは思わなかったけどね」

「そうね」

ふふつ、と、カジちゃんこと梶井さんは大人びて笑った。

お祭りがフィナーレを迎えた後に、僕らは二人夜空を仰いでいる。十数年ぶりの再開だった。カジちゃんは、あの時の面影を少し残したまま、

全くの別人になっていた。とても綺麗で、多分、とても強い女性になったと思う。

「幸弘くん、全然クラス会に来ないんだもん。あなた達のせいで、毎回全員揃わないんだから」

「ごめん、あの時は丁度息子が生まれたばかりで、顔を出せなかった」

「さつきの子？」

「うん。やんちゃ坊主で手をやきつぱなし。下の子の方が大人しいくらい」

「へえ、意外ね。幸弘くんの子なら、全然手を焼きそうにないのに」

「ははは……」

それを言われたら、笑っしかなかった。あれはどちらかというと母親似なんじゃないかな、なんて。

「でもカジちゃんグレイプ屋になるだなんて、あの時誰が考えただろうね」

「キングオブ不器用の称号を持つ私がね。人間、その気になればなんにでもなれるものよ。私のように、鉛筆も削れなかった子がグレイプ焼き

の達人になれるみたいだね」

「自分で達人って言っちゃったよ」

でも、あの悟の顔を見た限り、強ちそれも間違いいではないらしい。笑おうとしたけれど、少しだけ微笑むに留めておいた。

「私は、多分、変わったと思う。良い面でも、悪い面でも。あなたはど
うなのかしら、幸弘くん。色々聞かせて欲しいわ」

「うーんと、じゃあねえ……」

涼しげな夏の夜、色とりどりの花々が顔を出す。それは誰かが飛ばした夜の火花だったり、僕が見た昔の記憶だったり。アルバムに挟んでいた押し花は決して色褪せることなく、僕らはお互いの思い出をあの時のように二人並んで捲っていった。

指をおさえて保健室に行くと、そこには既に先客が居た。椅子に座って、指に大きな絆創膏を巻いた女の子。カジちゃんだ。なんだか、とても元気がない。

「あら、二人目ね。こちらに来て、梶井さんは少しベッドの方に居てね」

入り口に立っていた僕は、カジちゃんがゆっくりと離れた椅子の上に腰かける。傷口を見せると、先生は手慣れたふう消毒してゆく。

「あなた達も大変ね。彫刻刀なんて危ないもの、どうして授業で扱うのかしら」

僕は適当に笑ってこたえる。それよりも気になることがあったから。

「あの、カジちゃんも指切っちゃったんですか？」

「そつよ。で、戻りたくないってぐずってるの」

絆創膏が貼られて、「はいお仕舞い」の合図がかけられた後、お礼を言つてカジちゃんのベッドへ行った。

「カジちゃん、一緒戻ろっ」

僕の誘いに、カジちゃんは首を振った。なんだか、ひどく怯えている。

「先生に怒られちゃうよ」

僕が手を伸ばしても、カジちゃんは首を振るだけだった。

「長谷くん、少しそつとしておいてあげて。先に教室に戻ってなさい」

僕らの様子を見て、先生は僕にそう言った。本当は戻りたくなかったでも、仕方がなしにカジちゃんに背を向けた時、

「だって、また失敗するのが怖いんだもん」

小さな囁きが耳を突いた。

僕は振り返ろうとしたけれど、そのまま扉を開けて、後ろで閉めた。

35 鳴いて泣いて

モザイクマ

藤野完助の掌のアマガエルは、数回鳴いた後、雪の上に放られた。

大正三年の冬、今年も秋田の阿仁にツキノワグマを眠らす雪が覆った。

完助の暮らす集落は川が幾つもの沢となつて山々の懷に消えていくどんづまりにあった。沢筋のわずかな平坦地以外は、水田を拓こうにも可能な土地がなく、山麓の耕地に棚田や段々畑が作られていた。今は雪に埋もれた畑の隅、日本海を望むようにひとつの墓があった。

金カンジキを装着した毛足袋を履き、アオシシ ニホンカモシカの毛皮を纏った完助は、雪を掘った上に刈った芝を敷いて火を焚いていた。麻袋からアマガエル取り出して掌に乗せると、ひと鳴きし、ふた鳴きすると、前足と後ろ足を腹の下にしまった。

完助は空を仰いだ。だが、待ちわびる雨は厳冬期に降るはずもない。

みぞれどころか雪も降りそうもない冬晴れの空から注ぐ陽に尾根は輝^{ナガネ}き、完助は嘆息に近い溜め息をもらすと、掌のカエルを雪上で縮こまるカエルに放った。

完助の半ば奇行な行動が始まったのは二十年前。すべては重吉のためだった。

狩猟組の頭領^{スカリ}を務める完治郎の長男として生まれた重吉は、同い年とは頭三つ程背が高く、躰つきは筋肉隆々で完治郎は将来に期待していた。だが歳を重ねることに気性が荒くなり、他の狩猟組と喧嘩して怪我を負わしたり、根っからの好色から、村を廓と考え、村の娘を娼妓のように夜這いを繰り返す重吉に、完治郎をはじめとする村の大人達はほとほと困り果てていた。

16歳になっても何故か拒み、初マタギをまだ済ませていなかった。重吉は初マタギを経験していなくとも、村のみなに隠して山入りをしていた。鳴り声をあげ、隠れ処から飛び出してきたクマを射手^{フッパ}の位置に追いつ立てる勢子^{セコ}やクマを仕留める射手や全体を指揮する頭領で狩る巻き狩りも、外の地域に獲物を求めて遠征する旅マタギもできない重吉は、越冬穴でクマを獲る穴グマ猟や、吊り天井式の圧殺罠、金属製のトラバサミやくくり罠などで動物を獲っていた。しかし重吉の個人猟は完治郎が頭領をする完兵衛組には手に取るように知られていた。

猟場^{クラ}には狩猟組の縄張りがあり、重吉はわかっていながら完兵衛組の

庭で猟をしていたからだ。完治郎はいずれ我が組に入るものだとか俄か講師を大目に見てきたが、一向に重吉は初マタギを済ませず、我が物顔で個人猟に拍車をかけていった。完治郎は、掟や禁忌のこともあり重吉に注意した。だが、腕は確かで将来は頭領になる素質を持つ重吉に、どんな形であれ腕を磨く行為に強くは言えず軽く示唆する程度だった。

熊、アオシシ、テン、オコジヨ、ウサギの皮や、クマの胆嚢を乾燥させて作る熊の胆から重吉は現金を得ていたが、特別何かに使うわけではなかった（遊廓で遊ぶお金は除く）。

祖母のカヨから雨鳴きの民話を聞かされたのは、ちょうどその頃だった。

「カエルの息子は親の云うことをきかねひねくれ者で山へ行^アべと云われつと川へ行べんだと。んで川へ行べと云われつと山へ行く。」

夏の夜、燭台に立てられた口ウソクが鏡台の上で灯り、炎の周りを蛾が飛び、話を守り立てるようにカエルがひっきりなしに鳴いていた。川の水で床に就く重吉、完助より五つ年上の清治郎、ふたりに挟まれる完助は、カエルの鳴き声を縫う、カヨの低い声を聞いていた。

「おっ父が病気で死んだとき、墓は山の上で作ってほしがったが、ひねくれ者のことだべしや、たぶん逆さつくるんだと考え、墓は川のそばさつくてけれ、と云っておっ死んだんだと。」

清治郎は聞き慣れた民話から、カヨが重吉に伝えたいことに気づいていた。幼い完助も幾度か耳にした民話だったが真意は理解できなかった。重吉はろくすっぽ民話を最後まで聞いたためしなかった。だがいまでも云わずに聞いているのは、襖を開けたカヨの顔がえらく真剣だったから。

「すかすな、息子はさすがに反省し、今度ばっかしは親の望みを叶えてやるうと思つて、川のそばさ墓をつくつたんだや。したつけ雨が降りそうになると、墓が流されるんではねが、息子は心配になつて鳴き騒ぐんだ」

民話が終わると「早よ眠れな」と背中越しに残すと、カヨは襖を閉めた。

「カヨ婆こそはよ寝れ」

清治郎は云いながら重吉の様子を窺つた。眠つたように見える重吉は、口ウソクの灯に集まる蛾を追うように、瞼の裏で眼を蠢かしていた。カエルは、雨が降り出すと幾分おとなしくなつていた。

その年の冬、まるでカヨが暗示したように山に墓が立てられた。

奥山で穴グマ猟をしていた重吉が雪庇^{マブ}を踏み抜いたのだ。

雪庇とは、尾根の風下に張り出した自然の落とし穴で、落ちると周囲の雪を道連れにして凍つた岩肌を滑落していく。

ボ口雑巾のような無残な遺体を見て、完治郎は悔やんだ。なんで重吉の山入りを無理矢理にでも止めなかつたんだと。

今まで雪庇に踏んだ者は何人かいたが、マタギ集はみな重吉の死は「山の神様からの罰だ」と云い揃えた。マタギが獵のために山入りする際、守らなければならない掟と禁忌があり、そのなかには女に関するものもある。山の神様は女の神様、しかも醜女なので、猥談などしようものなら嫉妬して、空を荒れさせたり、雪崩を起こすことまでしてのける。旅マタギをする場合、女房持ちのマタギは出獵前の数日間寝床を別にしておくから、好色の重吉の体から漂う女の匂いに、山の神様は我慢の限界に達したのだ、という噂は三日を待たずして狭い集落に広ま

つた。

清治郎もまた、泣き顔の裏で兄は掟を破つたから山の怒りに触れたんだと思つていた。

たとえ掟を破つたとしても、山を愛した気持ちは村人には伝わった。その思いを汲み取つて山に立てられた墓に、完助は毎日通つては涙した。涙には理由があり、死に対しての悲しみだけでなく、海辺はなく山に埋められた重吉を思つての悲しみも含まれていたのだ。完助だけが聞かされていた。山ではなく海を愛し、貯めたお金でいずれ獵船を買つて漁師になる重吉の夢を。重吉にとって、幼く純粋な完助だけが唯一胸の内を言える相手だった。

墓前でむせび泣く完助の掌には、いつもアマガエルが鳴いていた。

『雨が降りそうになると、墓が流されるんではねが、息子は心配になつて鳴き騒ぐんだ』

おぼろげの雨鳴きの民話を、完助はアマガエルが鳴けば墓が流されると勘違いして記憶し、骨を海へ流そうと毎日アマガエルを探していた。完助はカエルを探するのに長けていた。倒木や枯れ落ちた葉の下やごく浅い土の中で冬眠するカエルを瞬時に見つけることができたので、冬にも山でアマガエルが鳴いていた。驚くべきことに小春日和にケツケツケツと体温が上がつてしまい、冬眠場所で思わず鳴いた声の主も完助には容易に云い当てることができた。

「まだここさ来つたな」

空を見上げる完助の背中に清治郎が言った。

「ここさいるど落ち着くな」

重吉が亡くなって二十年。子供をひとり授かつた完助は完兵衛組で射手を、まだ未婚の清治郎は完兵衛組で勢子を任せられていた。いまだ、

墓が流れるわけがないと知りながらも完助は時々墓に来てはアマガエルを鳴かせていた。

「んだごどすたつて、雨が墓を流れさせるはげねべしや」

アマガエルの亡骸を見下ろす清治郎に、完助は「知ってたなが？」と驚いた表情で訊ねた。

「当たり前だべあし。おめの兄だぞ」

清治郎はずつと前から気付いていた。だが、土の中の骨は山の一部であり、骨を出したことで山の神様の怒りを買ひ、獵に影響が及ぶことを危惧し、いままで口外しなかった。

「完助、骨海さ流すが」

「いなが？」

「いいなや、もう。それに完助と同じくれえ、死^{サシトツ}た兄のごど好きだはげ」

春、旅マタギから帰った完兵衛組が巻き狩りを終えた後、完助と清治郎は鉄道で海へと行った。

骨の一部を還すと、ふたりの顔は自然と弛んだ。

「なあ完助覚えてつが？ 家族みんなでここさ来たごど」

「忘れるわけね。あの兄貴の幸せそうな顔も」

ふたりは陽が沈むまで海を眺めていた。見ていれば重吉の泳ぐ姿が見れそうな気がして。

清治郎が危惧していた山の祟りは、その年の冬におきた。山が、五歳になる完助の息子と呼んだのは空が白む前。夏にそまふの仕事で脚を痛

めた完助は、旅マタギをみおくつていた。完助が妻の一報を知ったとき、山の峰は金色に光っていた。

村の者に知らせ、一緒に搜索させると云う妻に完助はかぶりを振った。

「他の者だづだど余計に探すのに容易でねくなる。手掛かりの足跡^{トアト}を踏み消されちゃたまつたもんでねっ」

完助にはマタギとしての自負があった。普段動物の足跡と歩幅から、体調、体格、疲労まで推察できる完助は、たとえ新雪が多少掛かっていたとしても息子をすぐに探せると踏んでいた。

迷わず沢を目指す完助の頭の中では、昨日の昼に息子に話した言葉が去来していた。

昨日がちょうど重吉の命日で、親子で墓参りをしたとき、思わず雨鳴きの民話と幼い頃に墓前でアマガエルを鳴かせていたこと話してしまったのだ。だが骨を海に還したことは云わなかった。清治郎と他言しない決めていたから、妻にも云ったことはない。

沢のきわまで足跡は続いていた。

途切れたとこまで歩み寄ると、何か柔らかいものを踏み、完助がカンジキの裏を確認するとアマガエルが数匹潰れていた。

辺りを見渡したが、引き返した後はなかった。

数日後、完助は山に赦しを請うために「熊槍^{タテ}を収め」マタギをやめた。

翌年の春には清治郎がタテを収めた。遺体はあがらなかった。

それからというもの、完助は毎日アマガエルを探しては山の墓前で鳴かした。

完助はすべてを流したかった、村も、人も、山も、墓も、息子のいない現実を、どこかに。

それからの村の夏は静かで、悲しい季節となった。

アマガエルが鳴けない代わりに、完助が泣き続けていたから。

36 輪ゴムの達人

葉月 朱里

ぱしっ、軽い音をして机の上に立たせた鉛筆のキャップがはね跳んだ。中休みの教室にどよめき上がる。

僕はにやりと笑って同級生にガッツポーズをしてみせた。

「うめえなあ、野田。お前が伝説の達人じゃないのか」

友達の隆志が目丸くしている。

「まさか。まだ生まれてないよ」

僕は苦笑して次の輪ゴムを構えた。

うちの小学校には、ヒーロー伝説がある。

それは30年くらい前の話。

校庭で朝礼をしていたとき勢いよく飛んできた太い輪ゴムが、校長の

眉間に当たった。

不意をつかれた校長は台の上からバランスを崩して勢い良く転げ落ちる。

慌てて駆け寄った先生達はそこに見てはならないものを見た。

それは校長のスーツのポケットから地上にばら撒かれた女兒の盗撮写真だった。

校長は児童の盗撮をしていたのだ。

マスコミにまでは漏れなかったけど、ちょっとした騒ぎになり校長はすぐ免職となった。

でも、その輪ゴムを放った犯人はとうとう誰かわからずじまいだったらしい。

輪ゴムを放ったのは偶然だったのか、それとも計画的だったのか。

今となつては真相はわからないが、その事件は「輪ゴムの達人の伝説」として僕らの小学校で語り伝えられてきた。

ふと、視線を感じて僕は振り向いた。

目があったのは、佐崎さんだった。

彼女は股関節の病気で、いつも右手にステッキくらいの長さの「の字をした杖を持っている。

今日は珍しく廊下側の席から立ち上がって、僕ら男子の輪ゴム飛ばしの様子を見ていたようだった。

僕は彼女が友達と話しているのを見たことがない。

授業中にごく稀に聞く声は華奢な体形そのままのか細い声だ。

僕と視線があつと、佐崎さんは慌てて目をそらせた。

「はい、テストかえすぞ。名前呼ばれたら取りに來い」
チャイムが鳴って担任の大島が手にプリントを抱えて教室に入ってきた。

「植木、上野、……おつ江島、0 点の女王が今回 58 点あるじゃないか。まさかカンニングしてないだろうな」

いきなり点数をばらされた江島さんは顔を赤くした。教室に忍び笑いが起こる。

江島さんは名前がマリエと言って、お母さんが外国の人だ。

浅黒い肌に、大きな身体をしているためクラスの中ではちょっと異質な存在だった。

「もう少し痩せるよな」

受けたと思ったのか、大島は追い討ちをかけるような一言を浴びせかける。

担任は明らかに江島さんをターゲットにしていた。

それを感じるから、クラスにも江島さんをいじめても良いという雰囲気が出ており、彼女は良くからかいの的になっていた。

机の間を牛が走るような感じで、席に戻ると江島さんはテストを引き出しに突っ込んで涙をこぼし始めた。

「江島、打たれ強くないと人生渡っていけないぞ」

それだけ言っと、大島は黒板に向かって字を書き始めた。

これが、この教室のいつもの風景だった。

数日後、おなかの調子が悪く僕は母親から体育を休むことを厳命された。

「走ってる最中にトイレ行きたくなったら悲惨だよ」

母の脅しに屈して、楽しみにしていたドッジボールの授業を休むことにした僕は、やはり見学の佐崎さんと一緒にコートの近くの椅子に腰掛けていた。

こんなに間近に彼女を見たことが無かったが、外に出ないせいか肌が透き通るように白い。

三つ編みにされたさらさらの髪の毛を赤いリボンで結んでいる。

長い睫毛が切れ長の目に覆いかぶさるようにして揺れていた。

クラスの中には思いを寄せている奴もいるようだが、佐崎さんが寡黙なため、皆話しかけにくいらしい。

「さ、佐崎さんは、輪ゴム飛ばしを見るの好き？」

思い切って、話しかけてみた。

こくり、とうなずく彼女。

「ひゅーんと飛んでいくものが、好きなの。ボールや、鳥や、弓みたいなの……」

佐崎さんは視線を足に落として小さく呟いた。

「羨ましいから」

「僕のおじいちゃん、弓道をしているんだよ」

「じゃあ、野田君も？」

「うん、無理やりさせられているんだけどね」

「いいなあ、私でもできるかなあ」

不意の質問に僕が返事に窮していると、

「私、筋力はあるの。杖で鍛えてるから」

彼女は恥ずかしそうにニコリと笑った。

あれからなんとなく気になって、僕は時々佐崎さんの方を見るようになってしまった。

で、ひとつ発見したことがある。

誰も友達がいなかったのかと思っていただけだが、実はあの江島マリエが佐崎さんの手助けをしていることに気がついたのだ。

重い本や、実験の道具を持つての移動のとき、マリエがそつと彼女の分も持つてやっていた。

大声で話したり笑ったりしない二人だが、寄り添って歩く二人を見ていると視線で語りつくせるくらいの心の深いところでの結びつきがあるように思われた。

「江島、もつといい加減にしてくれよ」

その日の大島は特にひどかった。

「こんな問題、三年生でも解けるぞ」

なんだか嫌なことがあったのか、授業中何度と無く江島さんを攻撃した。

「来年、お前だけ中学に行けず留年だな」

酒臭いと女子が騒いでいたのもあながちデマではなさそうだ。

「大島、ヘンだよ」

「彼女にふられたんじゃないか」

女子がひそひそ声で話す。

でも、誰も表立ってマリエを担任の言葉の暴力からかばおうとはしない。

佐崎さんは……と見ると、唇を噛み締めて下を向いていた。親友の危機におとなしい彼女はどうすればいいかわからず悩んでいるようだった。

「江島、お前もここに来なくていいよ。クラスの平均点が下がるからな」

その一言が、致命傷だった。

次の日からマリエは登校して来なくなった。

「いやあ、最近は空気をさえぎる黒い塊が居なくて風の通りがいいなあ」

クラスの平均点が上がって、大島はご機嫌らしい。

マリエがいなくなつて一ヶ月。

担任はぼつかり空いた席を見て、につこりと微笑んだ。

その瞬間。

聞いたことも無い響きが耳を振るわせた。

竹やぶを強い風が吹き抜けていくような、鋭い音。

バシッ！

大島のめがねのフレームが、眉間のところで碎け散った。

スローモーションのように散る、フレームの破片と、崩れ落ちる大島。

止まった時を女子の悲鳴が、動かした。

どやどやと皆が立ち上がって、騒ぎ出す。

「どうした？」

悲鳴を聞いて隣の組の先生が駆け込んで来た。

「あああ、あああ」

視線を宙に泳がして、眉間から血を流した大島は腰を抜かしていた。

「輪ゴムだ！」

誰かが叫ぶ。

「マリエの祟りだ」

「達人が現れたんだ！」

騒然となった教室。

僕は、ふと視線を感じて後ろを振り向いた。

暗い海の底のような……冷たささえ感じないくらい冷たい。

そんな瞳で、佐崎さんは一人座って助け起こされる担任を見ていた。

教室の中から太い輪ゴムが見つかったけど、それが本当に先生を撃つたものかどうかはわからずじまいだった。

事情を調べた結果、江島マリエの件が明らかになり、先生側の問題が大きいという結論になって警察沙汰にはしないことになったらしい。

そんなことより、あれから担任が不登校になってしまって、近々クラス担任も変えられるようだ。

この輪ゴム事件の前から相当精神的にテンパっていたらしい。

これが引き金となって、とうとうクラッシュしてしまったようだ。

そんな大人の事情をユリアの副会長を務めるお母さんを持つ、隆志が僕にそつと教えてくれた。

輪ゴムを弄びながら隆志が呟く。

「後ろのドアが開いていたから、やつぱ不審者かなあ」

「ま、悪は滅びるってことでしょ」

僕はそれだけ言うのと、大きく伸びをする。

実は担任のメガネが割れる直前、僕は見たのだ。

佐崎さんが両手で髪をかき上げるような仕草をしたのを。

ぐいつ、と彼女の胸筋が大きく動くのが、服の上からでも見えた。

それは、ほんの一瞬。

彼女の席は、輪ゴムが飛んできてめがねを割った弾道とされる後ろのドアの前にあつた。

彼女のお父さんは昔、射撃の有名な選手だったらしい。

で、この小学校OBだそうだ。

いや、ただ、それだけの事なのだが……。

担任は居なくなつたが、江島マリエは戻ってきた。

「でも、みんなの頭を避けて、ここしかないってルートで一直線。誰があんなスゴイ技持ってたんだろう」

隆志と一緒に帰りながらまだ、首をかしげている。

「カマイタチ、って知ってる？」

「あの、冬に皮膚が切れるって奴だろ」

「きつと、あれだよ。あれ」

にやりと笑って僕は走り出した。

僕の影がくつきりと黒く、田舎道に浮かび上がる。

「私でもできるかなあ」

ふと佐崎さんの声が蘇った。

夏休み、彼女を道場に誘ってみよう。

杖で鍛えているんだから、絶対弓もひけるよ。
ふと、見上げた空は、突き抜けるほど青い。
夏はもうすぐだ。

37 脈診の達人

トキ2

男は自分では修行中の身であるといつも口にしていたが、仲間に言わせれば間違いなく達人だった。

男の仕事は医師だった。

数年前、師匠を亡くしてから修行の為に村を渡り歩き、そこで病に苦しむ人を相手に医療の腕を磨いていた。今日も漢方薬の入った桐箱を担いで歩いているのだった。

ある村へ辿り着いた。そこは高山と海の狭間にある、小さな村だった。海の幸、山の幸と共に恵まれた豊かな村だった。男はそこでいつものように村長に会い自分は医師であり修行の旅に出ていると伝え、具合の悪い村人たちを診察させて欲しいと頼んだ。村長は快く引き受け、最近体力が衰えてすぐに風邪を引くようになり困っている、とぼやいた。
「ではまず、村長さんから失礼して……」

男は村長を床に寝かせ、脈診をした。脈診とは患者の両手首を持ち、術者の人差し指、中指、薬指の三指を手首に軽く当てて脈動を診て患者

の身体のどこが悪いのかを探る一つの診察方法である。三指それぞれの場所には呼び方があり、人差し指は寸、中指は関、薬指を尺と言った。それぞれ寸関尺の脈は強さが異なったり、また脈動自体に特徴があったりする。術者はその情報をもとに、患者のどこに問題があるのかを判断する。

男は村長の脈を診て、一瞬眉を潜めた。

「食欲はどうです？食べられますか？」

「察しのいいお医者さまだ。実は最近、どうもお腹の具合が良くないのです。」

男はそうでしょう、と言ったが、それはどこかうわの空だ。男はもう一度村長の脈を診た。右手側、関の脈が触れにくい事、それは即ち消化に関わる『脾胃』の弱まりを示している。脈の弱まりは臓腑の弱まり。だから男は村長の食欲について尋ねたのだった。しかし、男はもっと別の事が気になっていた。

なぜ、寸と関の間の脈がこの指で触れないのだ？

「消化に良い薬を処方しましょう。他に具合の悪い方はいますか？」

男は桐箱の中から薬を出して村長に飲むように伝えてそこを後にした。

次は出産が間近であるという妊婦を診た。安産になるよう、診てもらいたいと申し出てきたのだ。非常に元気な妊婦だった。男はまた妊婦の脈診をした。

「どうですか？」

「はあ、これはこれは、ややのために養生に気を付けていたのでしょう。健康ですよ。」

男は満面の笑みで言った。そして村長の時と同じように寸と関の間の

脈を診た。妊婦もやはり、そこを触れなかった。

男は妊婦の傍らにいる旦那に向きかえて少し慌てた様子で言った。

「脈を……脈を見せてください！」

「構いませんよ」

男は旦那の脈を診た。そして青ざめた。やはり、旦那もその脈を触れなかった。

なぜだ。

男は思った。それは触れなくてはならない脈。拍動していなくてはならない脈。男は血相を変えて次々に村人たちの家に構わず押し掛け、脈を診て歩いた。

そして最後の村人の脈を診終ると、膝について崩れた。

「どうしました？お医者さま。」

村長は男の背中を擦った。男は村長の手を握り、目に涙を浮かべながら首を振った。

「ないのです。」

「お医者さま？」

男は唇を噛み締めて、声を絞りだす。

「皆様、とても健康です。望ましいほどに。しかし……為す術がないのでございます。」

「ホホッ、ホハッホハッホハッ！皆健康！それならいい！健康な者の前ではお医者さまも出番がないということか！」

村長は男の背中を今度は力強く叩き、崩れたままにいる男の手を取って立たせた。

「脈を診ただけで、私の身体の事を言い当てた。そなたはその道の達人になる素質でもあるのではないかな？」

村長の言葉を聞いて、男はさらに泣いた。そして村人たちの身体を診せさせていただいたお礼を何度も言い、男は村を出て三日三晩かけて越えた山を逃げるように登りはじめた。

桐箱を担いだ男は山の中で、震えていた。それでも歩く足は止まらなかった。

「あれは……あれは死脈。即ち寿命をさし、人が亡くなる時に医者などんなに手をかけてもどうにもならないとされる脈だ。あれが、どうして……どうして村人全員に！！」

泣きながら歩いていったのが悪かったのか、男は足場を踏み外し、転げ落ちた。背負っていた桐箱の蓋が開き、丹精込めて作った薬が男と共に落ちていく。

ゴゴゴゴゴゴッ……男は足場を踏み外したのではなかった。足場が激しく揺れ崩れ崩れたのだった。身体をしこたま地面に打ち付けて顔を上げると、村が見下ろせる丘にいた。その村を大きな高波が襲い掛かっていた。

「っ……」

津波だ！

そう思ったときには波が村を飲み込み、全てを沖に放り出していた。瞬く間に家を、家畜を、畑を、そして村人を、海へと誘い込んでバラバラにしていく。幸いにも男のいた山まで波は届かず、無事であった。

男は何か雄叫びのようなものをあげたが、津波の音で何もかもがき消された。そう、何もかも。

気味が悪いほど静かになってしまった丘で男は自分の手を見つめていた。そして自分の脈を触れてみた。トクン、トクン……。均等に響く己

の脈拍に、唇を噛んだ。

「師匠、私は死脈が解るようになりました。そして無力さを知りました。どうか、もうしばらく修行を続けさせてください。」

男は天に手を合わせ、村だったところに手を合わせ、涙を拭い、桐箱を担いで山を登りはじめた。

脈診だけで健康体である村人全員の死期を言い当てたこの男が『脈診の達人』と呼ばれ、後世に名を残し、医師たちの間で今現代まで伝説として残されているのは言うまでもない。

38 音の狂い

あやかり師

郊外の広い敷地にトラックが横付けされた。わらわらと従業員が寄ってきて箱をトラックから運び出す。一列になり、右から左へと箱が手渡されていく。

トラックの脇腹には黄色いひよこの絵が描いてある。養鶏場のトラックだ。箱の中身はひよこである。ひよこの箱は鶏舎に運ばれると入り口に綺麗に並べられていく。

「20万羽ね。」

トラックの運転手は伝票を手渡すと車をバックさせた。今度は違う鶏舎に行き出荷用卵の積み込みである。ひよこの箱を卸し終わった従業員が卵の積み込み作業に走っていった。

脇で荷卸しを見ていた髭面の男は、ひよこの箱に手を合わせると、ゲージの手前の椅子に座った。

「さて、始めますか。」

男の声に細身の若い男が箱を髭面の前に持って行った。髭面の男は箱を丁寧に開けた。

箱一杯に黄金色のひよこが入っていた。光を感知して、ひよこは賑やかにピヨピヨと鳴き出した。

ピヨピヨ鳴くひよこを髭面の男は驚掴みにすると、ひよいとひっくり返した。ひっくり返されたひよこは一瞬、鳴くのを止める。髭面の男はポイと左右に並べられた箱にひよこを投げ入れていく。ひよこは上手に箱の中に着地すると、ピヨピヨ鳴き始める。この間、数秒である。

ひよこの雌雄の選別作業である。髭面の男は両手でひよこを掴んでひっくり返し、ひよこを箱に投げ入れるを繰り返している。

ピョピョピョ、んーん、ピョピョ。ピョピョピョ、んーん、ピョピョ。
ヨ。

リズムカルなひよこの合唱が始まった。髭面の男は鼻歌を歌いながらひよこを掴んで、ひっくり返し、箱へ投げ入れていく。

「次のひよこ。雄、雌。ポイポイ。次のひよこ。雄、雌。ポイポイ。」

歌とは言えないような歌だが、髭面の男は呪文のように唱えては、歌を歌い、ひよこの選別をしている。

補助する若い男は髭面の男が選別したひよこの数を数えながら、ひよこの箱を髭面の男の前に置いていく。仕訳されたひよこは、ひよこの鶏舎に運ばれる。雄は食肉用で雌は卵用である。それぞれの鶏舎に運ばれ育てられる。

ピョピョピョ、んーん、ピョピョ。ピョピョピョ、んーん、ピョピョ。
ヨ。ひよこは箱から出され宙を舞い、宙返りをしては空を舞い着地していく。

大道芸人がジャングラーをしているように、ひよこの舞と歌は続く。

「ん？」

急に音が止んだ。髭面の男は一羽のひよこを掴み、ひっくり返したまま、ひよこをもう一度良く見ると手元の小さな箱にそっと置いた。

弱っているひよこは同じゲージには入れられない。鳴き声も弱々しい。

20万羽のひよこの中には弱っているひよこも多少は混じっているから仕方ないのだ。

ピョピョピョ…。か細い声で鳴くひよこに髭面の男は手を合わせると選別作業を再開した。

トラックが卵を積んで戻ってきた。運転手は鶏舎に向かって歩いていく

と鶏舎の入り口に積み上げられた空箱を見上げた。

「おつ、相変わらず源さん、仕事が早いね。」

鶏舎の脇で一服している髭面の男はやりと笑った。

「19万9997羽だな。3羽は昇天したよ。」

源さんと呼ばれた髭面の男は小さな箱を運転手に手渡すと手を合わせた。

39 プーリキ

たんぼぼ

午後の授業をサポートして神社に行った。

長い石段を駆け上がると眼下に米軍基地が見渡せる。俺のお気に入り
の場所だ。

鳥居をくぐると珍妙な男がひとり、参道の真中で空気椅子に座って
汗を滲ませていた。空気椅子ってのは、椅子に座るような格好で膝を曲
げて尻を浮かせている姿勢のことだ。

その男、スキンヘッドで超絶マツチョ。身につけてるのはピチピチの
ブリーフ一丁のみ。そしてデカイ。いや、そっちもデカイけど、身の丈
がモーレッツにデカイのだ。見た目で二メートルは軽く超えている。三メ
ートル近い。

そんな男に好奇心を抑えきれず、俺は思わず声をかけちゃった。

「こんにちは」

挨拶したら、男はグツと俺の顔を睨み返した。スッゲー迫力だ。ちょ
っぴり失禁しちゃったぜ。

「コンチワ」

おお、挨拶を返してくれた！しかも訛ってる。日系の米兵か？

「あ、あの、何をしてるんですか？」

「」

「えつとお、ホワットイズ」

ちくしょう、もつと真面目に勉強しとけば良かった。

「ダイジョブ、日本語OKよ」

マジかよ、勉強しとかなくて良かった。

「ナニしてるかと聞かれたならば、私はこれから空を飛ぶだよ、プーリ
キでネ」

おお、笑った。なんてプリーティーな笑顔なんだ。だけどプーリキって
何だ？空を飛ぶだって？

「あの、プーリキって？」

「Ohプーリキ is Poo-Power。オナラの力、プーの力、プーリキ。お腹
にいっぱいいっぱいgasためるネ。一気にブツ放すネ。するとアラ不思
議、どぴゅーんて飛ベルヨ」

俺は頭を抱えた。たぶんこの人は頭がちょっとアレな人なんだ。現実
ってもんがわかってないんだ。どうする？よし、俺が教えてあげよう。
「あのお、空を飛ぶくらいのプーするならブリーフが邪魔ですよ。勢い
が弱まっちゃう」

「Oh」

男は頬を赤らめた。

「でもネ、でもネ、世間体があるからネ、スッポンポンはチョーヤバいでしょ、でしょでしょ!」

なるほど、男の言い分はもつともだ。プリーフひとつでフリチン野郎と呼ばれずに済む。たった一枚の布が世間の目を柔和に変えてくれるのだ。

と突然、男が喚き始めた。

「Ohhh~きてるよ、きてるよ! チョーきてるよ! ヤバイよ! ヤバいくらいきてるよ! きまくってるよ! カモン! カモン! カモオオオ〜ン!」

何てこった。モーレッツに、いや、チョーモーレッツに息張っているではないか。パツンパツンな肉体美をコナクソってなくらいに紅潮させているではないか。

ぷ　ぷす、ぶびっ　。

漏れ出た先発隊に思わず鼻を摘む。腐ったタマネギのおいだ。

「フハアー……ッ……!」

男が吠えた。轟音が鳴り響いた。ファンタジックに表現すれば、菊のラッパが勇ましく吹き鳴らされた。

ぷっぷ、ばあー! ばほんっ! ば、ばんばんっ!! ばんばん! ばぼっ、すかつ、ちゅんちゅん、ぴよぴよ、どっどっどっ! どどどどどどお〜!!!!!!

プリーフの尻が破れた。砂塵が舞い上り渦を巻いた。両足が地球から離れた。そして男はすごい勢いと力で天高く飛び立ったのだ、プリーキによつて!

なんてすごいプリーキだ。プリーフときは屁でもないのだ。余計な心配をしちまったもんだ。すごい、すご過ぎる!

プリーキ恐るべし。鼻を押さえてさえキョーレッツな芳香が襲いかかってくる。すごい、すご過ぎる!

「ゲホッゲホッ、ウゲエ」

などと涙目でむせてると上空から閃光と爆音、ズバーン! ボボーン! てのが俺の体を揺さぶった。ついでにハートも揺さぶった。

驚いて見上げると米軍の戦闘機がミサイルを滅茶苦茶ぶっ放して、飛んで行く男をモーレッツに爆撃している。しかし、そんなのは屁のカツパと言わんばかりにミサイルを跳ね返しているではないか。プリーキだ、あれこそプリーキバリアーだ!

更に攻撃がひるんだのを見計らってプリーキアタックだ!

行け、プリーキパンチだ!

それ、プリーキキックだ!

やれ、プリーキビームだ!

それきたどっこい、プリーキブーメランだ!

すつとどっこいプリーキプリーキプリーキプリーキだ!

プーププーだ!

「ぬおおおおおつ! すつげー!!」

米軍機をいともたやすく撃沈させ、尚も男は天高く飛翔し続ける。そのプリーキは衰えを知らない。そして男は悠々と遙か青空の彼方へと消え去ってしまったのだ、黄色い飛行機雲を一筋残して。

すごい、すごいぞプリーキ! すご過ぎるぞプリーキ!

と、まあこんなことがあったんで、俺もプリーキを鍛えようと思っただ。思っただけだね。

ぶびっぷうー。